

全国学力・学習状況調査に関する研究

令和6年度の全国学力・学習状況調査は、国語、算数・数学、質問調査について実施された。調査結果や本県の経年変化等の分析からは、改善の傾向が見られた部分がある一方、依然として課題が認められる部分もあった。そこで、本研究を通し、本県の児童生徒の学力・学習状況の向上・改善のために、調査対象の学年のみならず、すべての児童生徒を対象とした学習指導改善、授業改善に役立てていただくことができるよう、見やすく、取り組みやすい「学力・学習状況充実プラン」を作成することにした。

＜検索用キーワード＞ 全国学力・学習状況調査 学力・学習状況の向上・改善
学習指導改善 授業改善 学力・学習状況充実プラン

研究協議会顧問

義務教育課指導主事
総合教育センター研修部長
総合教育センター基本研修室長

新 育大
横地 喜之
谷川永里子

研究協議会委員

総合教育センター研究指導主事
総合教育センター研究指導主事
総合教育センター研究指導主事
総合教育センター研究指導主事
総合教育センター研究指導主事
総合教育センター経営研究室長

杉山 寛仁
山田 和幹
永田 久恵
林 俊樹
國松 一彰
川口 晋（主務者）

1 はじめに

文部科学省では、全国的に子供たちの学力状況を把握する「全国学力・学習状況調査」を平成19年度から実施している。調査の目的は、①「義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る」②「学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる」③「そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する」ことである。

調査は、小学校第6学年及び中学校第3学年を対象に、悉皆調査方式で「教科に関する調査（国語、算数・数学、理科、英語）」と「質問調査」について実施され、その結果を踏まえて、授業の改善・充実を図る際の参考となるよう、国立教育政策研究所は全国の学校や教育委員会に向けて「授業アイデア例」を作成している。

2 研究の目的

令和6年度の全国学力・学習状況調査は、4月18日（木）に各校にて小学校6年生、中学校3年生を対象に行われ、今年度は国語、算数・数学が調査教科として実施された。そこで、全国の結果や本県の経年変化等を分析し、見えてきた本県の課題等を基に、児童生徒の学力・学習状況の向上・改善を図る

ため、調査対象の学年のみならず、すべての児童生徒を対象とした学習指導改善、授業改善の参考となるプランを作成することにした。

3 研究の方法

(1) 愛知県の児童生徒の傾向を分析

本県の児童生徒の調査結果を、全国の結果や本県の経年変化等と比較し、正答率や無回答率にも着目しながら分析する。

(2) 学習改善・授業改善のポイントの把握

調査結果の分析から見えてきた各教科の課題を踏まえ、「児童生徒に、つけたい・のばしたい力と授業改善のポイント」という観点で、授業のポイント等をまとめる。

(3) 授業アドバイスシートの作成

児童生徒が関心・意欲をもち、対話を通して学ぶ意味や価値を実感する場面、各教科の特質に応じて見方・考え方を発揮する場面、ICTを効果的に活用する場면을「授業アドバイスシート」として提案する。

4 研究の内容

(1) できるだけ楽しみながら基礎・基本の定着を図る

児童生徒が楽しく、切実感をもって学習したり、また学習を通して学ぶ意味を実感し、その学びを深めたり広げたりするほど、基礎・基本の定着度は増す。「児童生徒にとって学ぶ意味のある学習」、「教師から見て学ぶ価値のある学習」を実現する学習サイクルを計画的に組み立てる。

- ① 児童生徒が「解決したい」「追究したい」と思えるような課題を提示し、その課題の解決に向けて、必要な知識・技能を自ら求めたくなるような学習活動を設定する。
- ② 児童生徒が教科の本質に迫る学習活動を通して、基礎・基本を活用しながら、学ぶ楽しさを味わうとともに、自らの学びが深まっていくことを実感できる授業をデザインする。
- ③ 児童生徒が「振り返り」を通して、自分の学びを俯瞰的に捉え、足りないところを家庭学習等で主体的に補える学習サイクルに導く。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む

児童生徒の実態把握と教材研究を通し、授業や単元における学びを明確にした上で、教師が授業づくりを楽しみ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う。

- ① 児童生徒が課題意識（ワクワク感）をもちながら、学ぶ意味や価値を見だし、学習の見通しを立て、自己調整しながら探究したくなる学習課題を設定する。
- ② 児童生徒が各教科の見方・考え方を、どのような場面でどのように働かせることができるかをイメージし、児童生徒の目線で授業展開を考え、組み立てを工夫する。
- ③ 児童生徒がペアやグループで互いの考えを聴き合い、自分の考えを深めることができるような、少人数での学び合いの場を積極的に取り入れる。
- ④ カリキュラム・マネジメントを通し、児童生徒が各教科等で育んだ「見方・考え方」を発揮できる場面をつくり、教科横断的な学びを促す。

(3) 一人一台端末を積極的かつ効果的に活用し、学習活動の充実を図る

学習のねらいを明確にし、課題を適切に設定したり、児童生徒の実態を的確に把握したりすることで、ICT機器を効果的に活用する時間を確保する。ICT機器を活用することが目的ではなく、児童生徒

がより「主体的・対話的で深い学び」へ向かうための一つのツールとして、学習の種類・内容・難易度等に応じた効果的な手段として活用する。

- ① ICT機器を必要に応じて活用しながら、学びの記録を蓄積したり、目的に合わせて他者と情報共有したりする。
- ② ICT機器の活用を通した児童生徒の気づきや考えを可視化し、積極的に他者と関わり合う時間を設ける。
- ③ ICT機器を活用することにより、情報処理や情報共有のための時間を短縮し、学習のねらいに迫るために試行錯誤しながら考える時間を生み出す。

5 研究のまとめと今後の課題

令和6年度全国学力・学習状況調査の本県の結果を分析し、見えてきた各教科の課題を踏まえ、重点的に取り組んでいただきたい内容を、「児童生徒に、つけたい・のばしたい力と授業改善のポイント」という観点で、授業のポイントや参考例としてまとめた。また、児童生徒の関心・意欲を引き出し、児童生徒が対話を通して学ぶ意味や価値を実感する場面や、各教科の特質に応じて「見方・考え方」を発揮する場面、ICTを効果的に活用する場면을「授業アドバイスシート」として例示した。

どの学年においても「授業アドバイスシート」の事例を参考に取り組むことで、各教科における児童生徒の資質・能力の向上につながると考えている。しかし一方で、どの学年においても参考となるような視点で作成するため、具体的かつ実践的な内容を盛り込むことの難しさを実感した。

6 おわりに

学びの主体は児童生徒である。「教師が教える授業」から「児童生徒が学びとる授業」へ転換し、全ての子供たちが生涯にわたって学び続けることができるよう、日々の授業改善に取り組む必要がある。小学校・中学校の校種を問わず、それぞれの課題を共有しながら、今後も各学校における学習指導改善及び授業改善の一助となるために、より汎用性の高い、そして各学校のニーズに応じたプランの作成を目指していきたい。

参考リンク

学力・学習状況充実プラン

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/gimukyoiku/0000080520.html>